明石のコミュニティ・スクール
未来にむけて 学びをかえる
未来を創り 社会を支える 新たな学びと育ちのシステムづくり

Twitter
YouTube

KomiKomiSukuSuku

For The Future
No.270
2024
4.1

明石市教育委員会事務局学校教育課　mail：gakkyo@city.akashi.lg.jp

大久保北中学校コミュニティ・センター
大久保北中学校英語部“英語で俳句を楽しみましょう”

3月22日（金）に大久保北コミセンの「あかねカレッジライトコース」の講座として、大久保北中学校英語部とコラボによる“英語で俳句を楽しみましょう”が開催されました。

最初に顧問の先生から英語での俳句について簡単な説明や英語部の生徒の作品の紹介が行われました。参加者のみなさんも子どもたちの作品に触れる中で、少しずつイメージができてきたみたいでした。まずびっくりしたのが、講座がスタートする前の会場の雰囲気でした。グループに分かれたテーブルごとに中学生と参加者の会話がすぐに盛り上がり、中学生も参加者も笑顔にあふれていました。会場に入り、この雰囲気を感じただけで、この講座は大成功と思ってしまいました。

参加者のみなさんは俳句の素材となる写真を持ってこられており、その写真を中学生に紹介することで中学生と参加者の距離は一気に縮まったように思います。旅行の写真、ペットの写真、高校時代バスケットボールで活躍している写真、孫との写真・・・・、写真の背景にある話を中学生は興味深く聴いており、その楽しそうな中学生の顔が参加者のみなさんのエネルギーになっているようでした。

俳句づくりの作業として、参加者のみなさんが使いたい言葉を用紙に書きだしていきました。

中学生と一緒に写真を見ながら、その言葉を使いたいわけを中学生に伝えていました。例えばペットの写真を見せながら“かわいい”と書き出すと、中学生はその「pretty は・・・、cute なら・・・」、といった感じで参加者のイメージする“かわいい”にぴったりな英単語を探っていっていました。単語の微妙な違いを中学生自身の想いや、感じた印象をベースに伝えながら、単語を選んだわけを説明していました。参加者はその説明に対して感想・思いを中学生に返すといったキャッチボールをしながら、参加者と中学生のまさしく協働作業で単語を選び、作品を完成させていっていました。その作業をみながら、子どもたちは活字体、参加者は筆記体という違いに気が付きました。筆記体世代の私は、同じ世代の参加者の向上心に見習わなければと刺激をいただきました。

今回のこの“英語で俳句を楽しみましょう”で、中学生も参加者がより良い作品を創ろうと試行錯誤している姿をみながら、こうした姿が「オーセンティック・ラーニング」なんだろうなと感じました。

「オーセンティック・ラーニング」とは
世の中の急激な変化にともない、知識やスキルの新たな形成が求められています。そのためには、現実に起こっているいろいろな問題を解決する姿勢が必要です。そのような姿勢を身につける学びのあり方の１つが、「オーセンティック・ラーニング」です。
参照）みんなの教育技術　【知っておきたい教育用語】
https://kyoiku.sho.jp/99574/

「深い学び」の英訳は　authentic learning
資質・能力の育成を目指す現行の学習指導要領の授業づくりでは、学びの文脈を本物にすること、すなわちオーセンティックな学習が基本戦略になります。
その証拠に、文部科学省は「深い学び」の英訳として authentic learning を用いています。
オーセンティックな学習は、難しくありません。授業の文脈を、本来の自然なものに戻せばよいのです。慣れてくれば、むしろ従来の授業の文脈がいかに不自然だったかということ、また、だからこそ子どもたちも学びに今一つ身が入らなかったのだということに、納得がいくでしょう。
参照）光文書院 T-navi Vol.14　巻頭言「オーセンティックな学習（奈須正裕）より

この“英語で俳句を楽しみましょう”は、中学生にとって英語の授業や英語部での活動で身につけた英語のスキルだけでなく、様々な教科学習や体験活動の中で、また日々の生活経験で培ってきた個々の資質・能力や感性を発揮する場だったのではと思います。中学生にとって、身につけた資質・能力をより深めていくためはこうしたオーセンティックな場が必要なのではと感じました。

また、コミセンでのこうした学びの場に参加される高齢者のみなさんが積極的に学びを楽しむ姿や、参加者のキャリアに触れることは、中学生や高校生がこれから自分のキャリアを考えていく上でも大切なことだと考えます。そうした参加者の姿がオーセンティックな学びにしていくのだと思います。

今回の“英語で俳句を楽しみましょう”を、コミセンの講座として捉えるだけでなく、教科を超え、多様な人と触れ合い、社会につながる学びの場の一つとして考えていくことが今求められているのだと考えます。そう考えると「社会に開かれた教育課程」のイメージができてくるのではと思います。

今回の大久保北コミセンでの取組は、子どもたちの学びを学校の中だけで閉じた文脈で捉えた「教育課程」ではなく、社会とつながりながら、持続可能な学びへと広げていく文脈で捉えた「社会に開かれた教育課程」をデザインする上で参考になるのではと考えています。

一度、オーセンティックをキーワードに新年度に向けて、対話を始めてみるのも面白いのではと思います。そんな一歩が大きな一歩になると考えています。

（文責：北本）